

絶海中津の関東再遊について

朝 倉 和

はじめに

絶海中津（一三三六—一四〇五）は、法兄の義堂周信（一三二五—一三八）とともにその漢詩文を「五山文学の双璧」と称せられている。二人はともに、夢窓疎石（一二七五—一三五二）の弟子で、「五山文学」の最初の開花期である、南北朝時代から室町時代前期にわたって活躍した禅僧である。

絶海の伝記史料として最も基本的なものは、弟子の叔京妙邨が撰述したとされる「仏智広照浄印翊聖国師年譜」（以下、「仏智年譜」と略す）である。たとえば、古くは正元師蛮の「延宝伝灯録」から、最近では玉村竹二氏の「五山禅僧伝記集成」（講談社、昭五八）に至るまで、「絶海中津」の項の記述はこの年譜に全面的に拠っている。が、この年譜に記載されている履歴をただだけでは、絶海の生涯を網羅したとは言えない。なぜなら、別系統の絶海の年譜であ

る「勝定国師年譜」（以下、「勝定年譜」と略す）や、絶海の詩文集である「蕉堅薬」、義堂の日記である「空華日用工夫略集」（以下、「日工集」と略す）等によって、絶海の新たな事跡を確認し得るからである。本稿において取り上げた、絶海の関東再遊もその一つである。

一 関東再遊の事実

「仏智年譜」貞治三年（一三六四）条に「是の歳、一策、翩然として関東の行有り」とあることから、絶海が入明前に京都から関東へ赴いたことを指摘する研究者は多いが、帰朝後に再び関東へ赴いていたことを指摘する人は誰もいない。しかし、「蕉堅薬」をつぶさに見ると、「竹隠上人の詩軸に跋す」（一四五）につきのような記述がある。

（上略）上人蚤入「吾古天法兄室」。而蒙「慈氏天祐」老之賞識。

可謂「士之有_レ遇者」矣。予嘗自_レ甲往_レ相。見_二上人於南陽寓所_一。竊喜_三其巖然風骨_一。卓_二絶于諸子之輩_一。且慶_二吾兄之有_レ兒。而不_レ能_レ忘_レ懷矣。今觀_二諸彦之詠_一。猶_二吾曩日之懷_レ感而不_レ已。於_二是乎書以塞_二其請_一。

【注】「竹隱上人」については、藤木氏や梶谷氏が指摘される竹隱自蔽ではなく、竹隱中簡のことではないか。本文中には「上人、蚤₂に吾が古天法兄の室に入りて」とあり、玉村氏『五山禅林宗派図』（思文閣出版、昭六〇）によると、竹隱自蔽が大休正念―嶮崖巧安―容山可允―竹隱自蔽という法統を承けているのに対し、竹隱中簡は夢窓疎石―古天周誓―竹隱中簡という法統を承けているからである。また、「古天法兄」とは古天周誓、「慈氏」とは義堂周信、「天佑」とは天佑藏海のことである。なお、禅僧の法系・道号・法諱に関しては、以下も玉村氏・前掲書を参考にする。

絶海が、快川和尚の「心頭を滅却すれば火もまた涼し」ということとは有名な甲斐の乾徳山惠林寺に入寺したのは、康暦二年（一三八〇）十月のこと（『仏智年譜』）、その後、彼が甲斐から関東へ再び赴き、「南陽の寓所」で竹隱上人と相見したことがわかる。『大日本地名辞書』や『日本地名大辞典14 神奈川県』（角川書店、昭五五）や『神奈川県地名』（日本歴史地名大系14、平凡社、昭五九）を見て、相模国（神奈川県）に「南陽」という地名は存在し

ないので、「南陽の寓所」とは南陽山報恩寺のことであろう。そして、『日工集』によると、義堂が報恩寺を建立したのは応安四年（一三七一）十月十五日のことなので、諸書において絶海が関東に赴いたとされる貞治三年―貞治五年の間に、報恩寺で絶海と竹隱上人が対面することは不可能であると思われる。ただし、報恩寺の前身にあたる寺は、すでに建立されていたと考えられる。

また、『臥雲日件録抜尤』長祿元年（一四五七）二月三日条には、三日、齋罷、洪恩院主來、茶話之次、問_二怡雲先師自_二大明_一掃朝之事_上、答曰、雖_二掃朝_一尚在_二筑紫_一、普明国師聞_レ之、遣_レ使_二頼促_二掃洛_一、蓋意在_二法嗣_一也、時絶海同掃朝、欲_三直赴_二関東_一、時慈氏和尚在_二鎌倉_一、然国師命重、遂入京云々、（下略）

【注】「洪恩院主」とは竺峰周曇、「怡雲先師」とは汝霖妙佐、「普明国師」とは春屋妙葩のことである。

とある。この竺峰周曇の懐古談を見ると、永和三年（一三七七）、汝霖妙佐とともに中国から帰朝した絶海は、ただちに関東に赴かんと欲している。と、いうのも、当時、義堂が鎌倉の報恩寺に在ったからであり（『日工集』）、彼に依頼されていた夢窓の碑銘の件について報告しておきたのだからと考えられる。その後、永和四年（一三七八）に京都でしたためた書簡にも、

（上略）小弟夏秋之間。將_レ有_二東行_一。枉_レ道躬詣_二上利_一請_レ教。且金沙池畔。可_レ恣_二旬日之盤旋_一也。維時春深。冀若_レ時

珍愛。不_レ勝_二祝望之至_一。〔与_二金剛物先和尚_一書〕(一四六)

【注】「物先和尚」とは物先周格のことである。また、「金沙池」とは金剛寺十境の一つであり、「空華集」巻第七に、

伝聞西雲老人。過_二江金剛新寺_一。標_二其境_一而為_レ十。

日雜華世界。日毘盧宝閣。日円通境。日養正齋。日先照

堂。日金沙池。日得月軒。日甘醴亭。日九里松。日靈聖

廟。蓋湖上之勝槩也。(下略)

〔五山文学全集〕第二巻。返り点は同書や蔭木氏

「義堂周信」(日本漢詩人選集3、研文出版、平一)等を参考にして、私に施した)

という文章がある。

とあり、永徳二年(一三八二)に甲斐でしたためた書簡にも、

茲承從者暫離_二伊豆_一。坐_二夏三川_一。雖_レ未_レ得_二面晤_一。以_二稍近_一為_レ喜。老嫗日劇。世味淡然。独於_二故旧_一。不_レ能_レ遣_レ情。東望悵悵而已。幸因_二便風_一。以_レ寄_二音塵_一。惟時春深。伏冀珍寄。

〔答_二久菴和尚_一書〕(二)(一五二)

【注】「久菴和尚」とは久菴僧可のことである。

とあることから、絶海が依然として再び関東に遊学する意志を持ち続けていたことがわかる。

横川景三(一四二九〜九三三)の『小補東遊集』には、

余在京師_一日、語_二桃源_一曰、乃祖勝定老師、曾遊_二大唐_一、道

徳文章、衣_二被南国_一、一朝來帰、東人化_レ焉、暇日招_レ諸老鳴_二

乎斯文_一者_上、比_レ辞対_レ句、我曇仲老漢其一也、今也青衿、

往々伝_二写其句_一、以為_二一集_一、実希世_二玉宝_一也、老漢蓋乃祖老

門生也、通家有_レ好、公何不_レ統_レ之乎、(下略)

【注】「桃源」とは桃源瑞仙、「勝定老師」とは絶海中津、「曇

仲老漢」とは曇仲道芳のことである。

とあり、絶海の道徳および文章が中国の人々にも感化を与え、帰国後も「東人」が教化されたという。もしも「東人」が関東の人を意味するならば、絶海が帰朝後に関東に赴いていたことを示す根拠の一つとなるだろう。

二 関東再遊の時期

それでは、絶海が関東に再遊した時期について考えてみたい。恵林寺の住持としての任務を終えてからの行動を整理してみると、まず『日工集』¹⁰永徳二年(一三八二)十一月三日条に、

十一月三日、昌勤至、出_二絶海書_一、乃審_下退_二恵林_一、今帰_二普同庵_一、為_二田地訟_上、

【注】「昌勤」とは心伝昌勤(慧勤)のことである。

とあり、永徳二年十一月三日の時点で、恵林寺の住持を退き、同寺の塔頭である普同庵に帰住していたことがわかる。また、『蕉堅稟』所収の「西胤上人の雨中唱和の詩の序」(一四三)には、つぎのよ

うな文章がある。

甲之為_レ州。環以_二群山_一。帯以_二衆川_一。而蔽_二乎大岳之陰_一。故山川之氣。交会鬱結。盛暑則雲雨騰作。候狀不_レ恒。而我勝善練若。雖_レ当_二劇驟_一。無_二林木以為_二蔽障_一。則迥然孤村也。関西西胤上人。一日对_二孤村雨_一。望_二群山雲_一。詩以寓_レ思。従而和者若干。徵_二叙於余_一。(中略)今年癸亥夏。五月不_レ雨。逮_二于六月癸酉_一乃雨。及_レ信而止。己卯又大雨。弥_レ旬不_レ止。余則始而喜。終而憂。而思亦隨_レ之何也。(下略)

【注】「西胤上人」とは西胤俊承のことであり、彼の詩は「真愚稿」に収められている。

雨中偶作

独坐孤村雨。高山四面雲。擁_レ窓昏_二貝葉_一。侵_レ砌長_二苔紋_一。唯合_二静中賞_一。何堪_二秋裡門_一。願實_二天上日_一。万国豁_二妖氣_一。

〔五山文学全集〕第三卷。返り点は私に施した

また、「癸亥」は永徳三年(一三三三)にあたる。

これによると、絶海は、永徳三年(一三三三)の五月から六月にかけて、甲斐の太平山勝善寺に滞在している。そして「日工集」永徳三年九月五日条に、

五日、絶海帰_レ自_二甲州_一、蓋惠林住院紀満也、入洛館_二于大慈院_一、余往略叙_二久闊之意_一、

とあることから、永徳三年九月五日に、惠林寺住院の期間を終えて、甲斐より帰京したことがわかる。その際、義堂は、ただちに三合院(臨川寺の開山塔)の別院である大慈院に泊まっている絶海の許を訪れ、旧交を温めている。

こうして見ると、考えられる絶海の二度目の関東訪問は、永徳三年の十二月頃から翌三年の四月頃にかけてか、もしくは永徳三年の七月頃から八月頃にかけてか、ということになる。すなわち、前者の場合は甲斐惠林寺(十一月三日)―関東―甲斐勝善寺(五月〜六月)―京都(九月五日)というコースを、後者の場合は甲斐勝善寺(五月〜六月)―関東―京都(九月五日)というコースを、絶海はたどったことになるのだが、「日工集」永徳三年九月五日条に「絶海、甲州より帰る」と記されていたことや、甲斐―関東―京都間の道のり、関東における滞在期間などを考え合わせると、わたくしは前者の可能性がより高いように思う。先に挙げた「久菴和尚に答ふる書(二)(一五一)に「老嬪、日に虧_レし。世味、淡然として、独り故旧に於いて、情を遣ること能はず。東に望みて恨々たるのみ」と記されていたが、絶海は、関東の旧知の人々に会うために、惠林寺の住持を退いてから京都に帰るまでの合間をねらって、甲斐からあまり離れていない関東の地を再び踏んだのではないだろうか。

もう一度、絶海と関東について、簡単にまとめておく。
○一度目(入明前)―貞治三年(一三六四)―貞治五年(一

三五六〇 (二十九歳〜三十一歳)

〇二度目(帰朝後) — 永徳二年(一三三二) 十二月頃〜永徳

三年(一三三三) 四月頃 (四十七歳〜四十八歳)

三 古河雜言五首

さて、絶海の生涯に「関東再遊期」を新たに認めることで、彼の詩文集である「蕉堅菓」の詩文の配列の解釈にどのような影響が齎されるであろうか。たとえば「日本古典文学大辞典」第三卷(岩波書店、昭五九)の「蕉堅菓」の項(名波弘彰氏執筆)に、以下のような記述がある。

【内容】全体は詩・疏・文から成り、詩は五言律詩二十六首・七言律詩六十七首・五言絶句十五首・四言四句四首(一首とする説もある)・四言十六句一首・七言絶句五十一首で、計一六四首。若干の未収載詩を含めても、義堂周信の「空華集」の詩数(一九〇首余)の十分の一に満たない。疏は十三編。文は序四編・書八編・説二編・銘六編・祭文三編で、計二十三編。他に明の太祖、明僧清遠懷渭ら数人の次韻詩が載る。詩の大部分は制作時期が記されていないが、絶海の応安元年(一二六八)入明以後の作から成ると推定されている。ただ七言律詩の「古河雜言五首」は貞治四年(一二六五)春、常陸古河での制作と考えられる(異説もある)から、入明以前の作も含まれている

ようである。本集の詩は義堂詩の偈頌中心主義に対し、偈頌を「語録」に移して、偈頌とは異なる詩の世界をうち立てようとしたものであり、皎然・杜牧・貫休・林和靖といった晚唐詩風に強く影響されている。(三四〇頁)

【注】本文中の異説に関しては、いまだに管見に入っていない。義堂の「空華集」巻第八の「次_レ韻賀_三靈姪住_二穂州安国_一」という詩に「古河東畔天平寺」、「乙巳春。予_レ帰居_二天平_一」。歳歎。又上人回_レ里」という詩に「帰来臥_レ病古河浜」という句があることを援用して、従来の研究者は、絶海は貞治四年(乙巳)の春、天平山安国寺(現在は廃寺。今枝愛真氏「中世禅宗史の研究」(東京大学出版会、昭四五)、一一七頁参照)に病気で臥していた義堂を見舞うために古河(今の茨城県古河市。利根川流域にある)を訪れ、その際に詩(「古河雜言五首」)を詠んだと考えている。しかし、この年の絶海の行動については確証がない。【仏智年譜】¹⁾貞治四年条には、

四年乙巳。師年三十歳。当_二此時_一折公力革_二鷲風_一。凡_レ叢林職事非_レ徳不_レ举。率_二試_三以_二提唱偈頌_一。特_レ拔_二典_一藏_レ論。次_二以_二却来_一遷_二待香_一。

【注】「折公」とは大喜法折のことである。また、「却来」という語は、「禪林象器箋」(無著道忠著)の第七類・職位門に「忠曰く。却来は洞家の挙唱なり。正位に向かふを向去と為

す。正位より偏位に來たるを却來と為す」という記述があるように、職位が下がつて勤めることをいう。

とあり、建長寺の大喜法忻の会下にあつて、藏主や焼香侍者を司つていたことだけがわずかに明らかである。

ところで、絶海は、帰朝した直後に九州で詠んだ「人の相陽に之くを送る」(五一)という詩のなかで、「到る日、諸昆、もし我を問はば、倦懷、昔の清狂に似ず、と」と詠じている。入明する前に(京都や)関東で修行に明け暮れた青春の日々を思い起こして、かつての自身を「清狂」と評しているのである。「清狂」という語は、「漢書」武五子伝第三十三に、

清狂不_レ惠_レ蘇林曰。凡狂者陰陽脈尽濁。今此人不_レ狂似_二狂者_一。故言_二清狂也_一。或曰。色理清徐而心不_レ慧曰_二清狂_一。清狂如_二今白癡也_一。

という記述があるように、精神的には狂つていないのだが、その言行が狂者に似ているものを指して言うようである。あるいは、一途な禅道修行が周囲との妥協を許さない行動に彼を走らせていたのであろうか、と思われる。このような精神状態にある時、果たして絶海は「古河雜言五首」を詠むことができたのであろうか。

結論から先に述べると、わたくしは、永徳三年の春、関東に再遊した時に「古河の雜言 五首」(六〇)を詠んだのではないかと、考えている。以下に問題の六十番詩を掲げて、その理由を列挙して

みたい。

六〇 古河雜言 五首

①初來借_二宿古河湄_一。聞見令_二人事々疑_一。官渡呼_レ船招_レ手息。村春殷_レ榻得_レ眠遲。江雖_レ可_レ愛少_二奇石_一。花縱堪_レ看多_二醜枝_一。宝樹宝池天上寺。春風春雨過_二掃期_一。

②杜陵不_レ睡_二青城地_一。風土如_レ斯豈復疑。蘆荻洲暄抽_レ筍早。參苓地瘦長_二苗遲_一。病駒但仰新恩秣。倦鶴応_レ懷旧宿枝。且待_二蓬萊清淺日_一。踏_レ鯨直欲_レ訪_二安期_一。

③柴門捨_二在水之湄_一。慣_レ看沙漚稍不_レ疑。香氣陰窓_レ晨霧潤。棋声深院夕陽遲。翠楊烟暗藏_二鴉葉_一。紅杏花低掛_二鳥枝_一。買_レ地刺栽_二松与_二竹_一。願言長作_二歲寒期_一。

④巖拙慚_レ吾成_二性癖_一。林居幸免_二口時疑_一。薰炉茗盃招_レ人共。蒲薦松牀留_レ客遲。工部惟_レ憐_二北岫_一。贊公甘_レ欲_二老_二西枝_一。溪山未_レ尽_二登臨興_一。江海誰_レ同_二汗漫期_一。

⑤平生講_二学知_二天命_一。造物小兒何_レ用_レ疑。絕寒病時_レ旅寓。荒村投_レ処且_レ栖遲。際_レ空_レ_二空_レ色_レ煙連_レ草。高_レ夜_レ松_レ声_レ月在_レ枝。千載九原如_レ可_レ作。香盟_レ心_レ下_二遠持_二一期_一上。

まず第一首目の「掃期を過す」ということばについて。「絶海が甲斐の勝善寺に帰るべき期日が過ぎた」と解すると、「山梨県の地名」(日本歴史地名大系19、平凡社、平七)の「甲府市 勝善寺」の項に、

後屋町地区南部にある。太平山と号し、臨済宗妙心寺派。本尊は木造釈迦如来。嘉慶元年（一三八七）八月一九日の同像の胎内墨書銘によれば、貞和三年（一三四七）頃に浄土宗系寺院から禅宗寺院に改宗、無量寿仏（阿弥陀仏）を焼失したため、勧縁比丘周亮が僧俗男女等に勧進して浄財を集め、大仏師増光を招いて瑞雲庵で釈迦如来像を造り、勝善寺に安置した。同銘文にみえる住持比丘中津は臨済宗夢窓派の高僧絶海中津で、多数の僧侶とともにこの仏像の造像計画に深く関係していた。銘文の多くを占める勧進に応じた者を書上げた人名・法名のうち法光は武田信成の法名、満春はその子布施満春、頼武は満春の子と考えられ、武田一族の本尊造頭への関与がうかがわれる。永禄年中（一五五八—七〇）に天観が中興したと伝える（寺記）。

（下略）

（三九一頁）

という記述があることから、甲斐に帰らねばならない諸事情の一つとして、同寺の釈迦如来像の造像計画があつたのかも知れない。なお、詩中に「天上の寺」とあるのは、先にも触れたが、古河東畔—おそらくは現在の古河市付近にあつたと推定される安国寺のことであろうか。

つぎに第二首目の「病駒、但だ仰ぐ、新恩の秣。倦鶴、まさに懐ふべし、旧宿の枝」という詩句について。藤木氏や寺田氏も指摘されているように、「病駒」や「倦鶴」は絶海自身のことであろう。

そして、甲斐でたためられた「法華元章和尚に与ふる書」（二四九）に、

（上略）幸甚。論「及数与^二等持法兄^一相会上。此老一団和氣似^レ坐^レ春風之中^一。和尚与^レ之周旋。必当^二目撃而道存^一。歎艶歎艶。多宝景德笑山無求。亦時時往来相会否。千里懷想。西望^二德星之聚^一而已。秋序方^レ杪。惟冀為^レ法自衛。以副^二翹祝^一。【注】「元章和尚」とは元章周郁、「等持法兄」とは義堂周信、「笑山」とは笑山周恂、「無求」とは無求周伸のことである。

というくだりがあることを考え合わせると、辺境の地と言っても過言ではない甲斐の恵林寺における約二年間の住持生活を経て、精神的にも肉体的にも疲れ果てた絶海が、「旧宿」たる京都を恋しく思い、「新恩」たる公帖が発行されてそこに呼び戻されることを望んでいる、と解釈することはできないだろうか。

第四首目の「休居」という語は、「諸橋大漢和辞典」には「官職を辞して家に居る。致仕して家に居ること」と説明されており、「韓非子」¹³十過や「商子」¹⁴墾令の用例が挙げてある。たとえば、前者の用例を見てみると、

昔者齊桓公九^二合諸侯^一、一^二匡天下^一、為^二五伯長^一。管仲佐^レ之。管仲老、不^レ能^レ用^レ事、休^二居於家^一。

とあり、齊の桓公の補佐をしていた管仲は年老いて、仕事に堪えられなくなり、家に引き籠もって休んでいる。絶海は直前に恵林寺の

住持を辞していたからこそ、この語を用いたのであるうと思われる。

第五首目の「学を講じて」ということばについて、藤木氏は「修行に励んで」（『蕉堅稟全注』、一一五頁）と訳されているが、これはそのまま「学問の講義をして」と訳するのがよいのではなからうか。芳賀幸四郎氏「中世禅林の学問および文学に関する研究」（日本学術振興会、昭三二）によると、当時の禅僧がいかに多くの書物—經書・史書、經典・禪書、詩文集等—を読み、そして講じていたかわかる。その様相は、たとえば義堂の「日工集」等を見ても、詳しく知ることができる。ちなみに義堂は、同書によると、応安元年（一二六八）八月二日、四十四歳の時に始めて、諸子のために高僧靈一の詩を講じている。¹⁶ここで、絶海の講釈活動について、知られている範囲で整理してみると、以下ようになる。

○康暦二年（一二八〇）→永徳二年（一二八二）—（学徒に対して）『法華経』『首楞嚴経』『円覚経』等 『仏智年譜・本朝高僧伝』（四十五歳→四十七歳）

○嘉慶二年（一二三八）正月九日→十九日—（足利義満に対して）『金剛経』 『仏智年譜・翰林胡蘆集』（五十三歳）

○嘉慶二年正月二十三日→晦日—（洪川幸子に対して）『円覚経』 『仏智年譜』（五十三歳）

○明德四年（一二九三）夏—（義満、空谷明応等に対して）

『首楞嚴経』 『仏智年譜・翰林胡蘆集』（五十八歳）

○応永二年（一二九五）—（義満に対して）『十牛図』 『仏智年譜・翰林胡蘆集・本朝高僧伝』（六十歳）

○応永十年（一四〇三）—（足利義持に対して）『信心銘』 『勝定年譜』（六十八歳）

貞治四年の春に「古河の襟言 五首」（六〇）を詠んだとすると、この時、絶海は三十歳である。また永徳三年の春に詠んだとすると、絶海は四十八歳である。絶海がどのような書物に関する講義を行なったのか、今となつては知る由もないが、少なくとも自らを「清狂」と評した三十歳の時に（講釈の）講師を勤めることは到底考えにくい。藤木氏もこのことを考慮して、前掲のような解釈をされたのかも知れない。同様のことは、同じく第五首目の「天命を知る」ということばについても言える。「天命を知る」とは、天から自分に与えられた使命、乃至は天から人間に与えられた運命を素直に受容する—それは自己の生き方に迷い、感情の動揺に身を任せ、人生に絶望しての諦めではなく、言わば、自己の運命を明らかにし、自己の生き方を自分なりに位置づけ、自己の生きるべき道を自覚することであると思う。こうした生き方は、「清狂」という心境とは対極的なものと言えるのではなからうか。「論語」為政第二に「五十にして天命を知る」とあるように、三十歳という若さで到達し得る境地ではないように思われる。

全体的にこの五首の詩のトーンは暗いものの、この一連の作に詠

まれている季節は、春であると思われる。

四 「蕉堅藁」七言律詩の配列順序

「蕉堅藁」は絶海の生前に著わされたもので、絶海自らによって厳選され、推敲を重ねられたとされている。(入矢氏、蔭木氏等)。たとえば七言律詩(二十三番詩)と六十八番詩)を見ても、中国での作(二十三番詩)と四十六番詩)、九州での作(四十七番詩)と五十二番詩)、京都での作(五十三番詩)と五十九番詩)とその配列がきちんと整理されている。そしてわたくしは、絶海は、永徳二年十一月に甲斐の恵林寺を退いて、翌三年五月に同国の勝善寺に入るまでの間に再び関東に遊学し、「古河の襟言 五首(六〇)」を作成し、それらの詩を一括して、京都での作の後に置いたと考えるのであるが、六十一番詩以降の七言律詩の詠作状況は、いったいどのようなようになっているのであろうか。

まず六十二番詩を見てみる。

六一 次韻答「肇太初見」寄 二首 太初時在「小山」

①喜聞高駕此重還。邂逅何時慰「眼前」。別夢依依迷「夜月」。孤

懷耿耿倚「春天」。草廬河上無「來客」。桂樹小山多「隱賢」。強

擬「臨」風歌「伐木」。詩篇未「得」共「芳筵」。

②憶昨逢「君相水辺」。榮如「瑤樹倚」風前。「千鈞筆力堪」扛「鼎」。

「萬丈文光欲」燃「天」。陶陸応「吾蓮社輩」。山王不「是竹林賢」。

只今室邇人還遠。灯火難「同」一夕筵」。

【注】「肇太初」については、一山一寧―雪村友梅―太清宗潤―

叔英宗播の法統を承けた太初真肇のことではないだろう。年

代的に合致しないからである。玉村氏も、「五山禅僧伝記集

成」のなかで、「太初真肇」の頃とは別に、「太初」の頃

を設けておられる。

詩題の下の自注に「太初、時に小山に在り」と記されているが、「小山」とは栃木県小山市のことで、古河から非常に近い距離にある。当時、ここには諸山に列せられた青原山大昌寺(現在は廃寺)。「中世禅宗史の研究」、二四一頁参照)があった。第一首目に「孤懷、耿耿として春天に倚る」という句があり、季節も春であることから、六十二番詩は関東(古河周辺)での作である。六十番詩と六十二番詩の間に位置する「諒信元の至るを喜ぶ(六一)もまた、関東(古河周辺)での作と考えてよいだろう。蔭木氏も「脚韻から推測すると、やはり古河での作品であろう」(「蕉堅藁全注」、一一七頁)と指摘されている。「春風、暖かに動く、鶺鴒の草」という詩句があり、季節は春である。

つぎに六十三番詩を見てみる。

六三 次韻靈隱亭

諸生多是口談「天」。壺隱高人愛「説」禪。竹徑邀「僧鳴」履出。

林亭遣「客枕」書眠。花吹「紅雪」香浮「座」。茗起「瀟雲」春動

甦。還退藏機未_レ密。已觀文彩映_二時賢_一。

関東に在住していた義堂の『空華集』巻第八にも「留_二題能叟居士_一」二首」という詩があり、この詩と同一の脚韻が用いられている。

留_二題能叟居士_一 二首

占_二得壺公小隱天_一。新開_二禁築_一寄_二逃禪_一。三春不_レ作_二花前

醉_一。六月偏宜_二竹下眠_一。每对_二高僧_一揮_二白塵_一。還嫌_二俗客

流_二青甦_一。疎鐘細警他年約。準_二擬栽_一蓮十八賢_一。

憑_二闌拳_一目眇_二青天_一。取_レ樂何曾在_二四禪_一。客散元龍樓上臥。

吟餘司馬醉中眠。竹陰避_レ暑風吹_レ帽。梅畔尋_レ春雪洒_レ甦。不_レ

待_二休官_一林下去。高風已見_二一人賢_一。

これは諸注の指摘するところであるが、同じく『空華集』巻第一にはつぎのような詩がある。

苦_レ熱。有_レ懷_二小山竹間壺隱亭子_一。

作_レ此寄_二主人能叟居士_一

三界炎炎火一団。就_レ中誰復得_二輕安_一。壺公隨處天如_レ許。一

榻橫眠万竹寒。

詩題に「苦_レ熱。有_レ懷_二小山竹間壺隱亭子_一」とあることから、「壺隱亭」が小山に存在したことが知られる。周囲には竹藪が生い茂っていたらしく、「蕉堅菓」六十三番詩には「竹徑に僧を邀へて履を鳴らして出で」、「空華集」には「六月偏宜_二竹下眠_一」「竹陰避_レ

暑風吹_レ帽」「榻橫眠万竹寒」という表現が見られる。と、いうこ

とは、この六十三番詩も関東（古河周辺）での作ということになる。季節も春である。なお、「能叟居士」については、関東武士ではなからうかとする説もある（『蕉堅菓全注』、一一〇頁）。

六十四番詩以降も、六十八番詩まで七言律詩が並んでいる。

六四 次_二韻栢樹心_一

老屋簷條万境空。簷前鈴語響_二丁東_一。鬢_二絲嗟_一我茎々白_一。文錦

覩_二君爛々紅_一。汗漫邀期游_二海上_一。風流玉謝出_二僧中_一。欲_レ

將_二拙語_一攀_二中高唱_一。一詠時号_二万竅風_一。

六五 送_二松上人帰_一綵州

東風望杏綵陽城。可_レ忍忽々此送_二行_一。曉渚鳴_レ鞭逢_二路熱_一。

晴江解_レ纜趁_二潮平_一。原情春淺鶴鶴急。山意雪殘鴻鴈驚。安

得_二海天霞片々_一。為_レ君裁作_二錦衣輕_一。

六六 送_二端介然上_一京

男兒志氣如_レ君少。欲_レ躡_二雲梯_一叩_二常關_一。碧海霞隨_二金錫_一

軛。瑤京日映_二錦袍_一温。仲靈書奏天顏近。大覺詔帰師道尊。

白髮回_レ頭江上客。鵬程九万看_二騰駕_一。

【注】「端介然」とは介然中端のことである。

六七 送_二復無已帰_一京

肝胆相知二十年。壯固共耆祖生鞭。暮容餘_レ我客天外。高步羨_レ君朝日辺。御苑桃花紅膩_レ雨。官街柳色緑勻_レ烟。長安如有_二故

人問^一。白首垂^二綸碧海前^一。

六八 寄^一有寬仲^一

我朋寬仲今詞伯。感^二此楊々意氣全^一。蛇吼^二匣中^一千載獄。鸞
回^二筆下^一五雲牋。小齋蛩雪愁同^レ案。上苑鶯花醉共^レ筵。已矣
無^レ由^レ攀^二往事^一。想君尚聳^二作^レ詩肩^一。

六十六番詩と六十七番詩が京都での作ではないことは明らかである。わたくしは、六十四番詩と六十八番詩もまた、関東（おもに鎌倉周辺）での作ではないか、と考えている。旧交を温めるために再び関東に赴いたにもかかわらず、古河周辺での作のみというのは不自然ではなからうか。絶海が老年期を迎えて、都から遠く離れた海のはとりで生活していたということは、たとえば六十四番詩の「鬢絲、我が茎々の白きを嗟^ゆき」、六十六番詩の「碧海の霞は金錫に随ひて転じ」や「白髮、頭を回らす、江上の客」、六十七番詩の「長安、もし故人の間ふ有らば、白首、綸を碧海の前に垂る、と」等の表現からも推察することができる。季節は、六十五番詩、六十六番詩、六十七番詩、いずれも春である。六十四番詩と六十八番詩の季節はわからない。

寺田透氏は、『義堂周信・絶海中津』（日本詩人選24、筑摩書房、昭五二）のなかで、六十五番詩については、「東風、望春たり、総陽城」という詩句に注目して、「そうすると総州を東と言っているのを根拠に、作者がすでに西帰し、さらに四国に「逃遁」のち作

つたものと見られよう。総陽が海路のかなたにあるとされている一点からも絶海の現在地は甲州ではない」（二五六頁）と指摘されている。また六十七番詩についても、「しかし詩の「長安もし故人の間ふあらば、白首綸を垂る、碧海の前」という句から、前作（六十五番詩、朝倉注）同様、至徳元年（一三八四年）以降絶海が阿波室冠寺にあつたときの作と見ることができ」（二五七頁）と言われている。たしかに阿波は海に面していて、上総や下総を東に望んでいるが、この地理的条件は、関東（とくに鎌倉周辺）にも当てはまる。わたくしは、この海浜での詠を、六十番詩から引き続き、関東（おもに鎌倉周辺）での作と考え、六十番詩と六十八番詩はすべて、絶海が関東に再遊している時に詠んだものであると考えるにいたっている。

おわりに

五山文学は、歴史学の分野では、史料として頻繁に援用されるにもかかわらず、文学の分野においては、ともすれば「傍流の文学」として敬遠される嫌いがある。禅僧が抄者である「抄物」は、専ら国語学の分野で活用されている。五山文学を明らかにするためには、禅僧特有の見方、考え方、感じ方を明らかにすることが求められよう。

今回の考察は、絶海中津に関する伝記研究の一環であり、彼の作品を読み解いていく上での、言わば基礎研究にあたる。今後は、絶

海の生涯に注目しつつも、「蕉聖藻」の詩文（とくに七言律詩以外）の配列についても考え、彼の作品世界へ入って行きたいと考えている。

【注】

(1) 「仏智年譜」の巻末には「応永三十年癸卯秋八月日 小師妙折撰」とあり、諸書は「妙折」を「妙祐」の誤りと見なして、同年譜の撰者を叔京妙祐としているが、わたくしは、その意見に首肯することができない。拙稿「絶海中津年譜考（一）——「仏智広照浄印翔聖国師年譜」の再検討——」（『古代中世国文学』第十三号所収）参照。

(2) 引用は「五山文学全集」第二巻、作品番号は鈴木英雄氏「蕉聖藻全注」（『清文堂』平一〇）による。返り点は藤木氏・前掲書、入矢義高氏校注「五山文学集」（『新日本古典文学大系』48、岩波書店、平二）、梶谷宗忍氏「蕉聖藻年譜」（和国寺、昭五〇）等を参考にして、私に施した。

(3) 「仏智年譜」康暦二年条に、

二年庚申。師歳四十五歳。春赤松氏擢「法雲」聘レ師。癸「汝森佐公」代レ之。秋以「釣選」開「法甲斐州松徳山惠林禪寺」。九月初三日就「絶海中津」受請。十月八日入寺。凡在「京師相陽」。有名之英納雲集。寺屋殆乎無レ所レ容。師不「拒」之。孜孜誘掖也。学徒參聞。禪宴餘暇。請而講「法華楞嚴阿含」等。細素聽衆汎溢矣。蓋師「化」推「興」于此。矣。

【注】「汝森佐公」とは汝森妙佐のことである。

(4) 「日工集」応安四年十月十五日条に、

十月十五日、余応「上」杉兵部諱公諱一、創「二」刹於鎌倉城北、名曰「報恩護国」、山称「南陽」、脚「基」演唱訖、余先試把「鏡」、開「十三」下、入「篋」中、而後、与「檀那」運搬一次、

【注】「上杉兵部諱公」とは上杉能憲のことである。

(5) 「鎌倉九代後記」（『改定史籍集覽』第五冊所収）の「応安」の項には、

同四年十月、報恩寺供養、上杉能憲執行入、義父伊豆守重能、去建武二年建立ニヨリテ也、

という記述があり、建武二年（二三三五）に、報恩寺の前身となる寺が、関東管領上杉能憲の義父重能によって建立されたことがわかる。ただし、「日工集」応安六年（二三七三）十月一日条に「報恩寺今号「南陽山」故也」とあることから、同寺の山号が南陽山と称されたのは応安四年以後のことであろう。

(6) 引用は東京大学史料編纂所編「臥室日件録抜字」（『大日本古記録』岩波書店、昭三六）による。返り点は私に施した。

(7) 「夢窓正覚心宗普濟国師碑銘」は「純群書類従」第九輯下「伝部」に収められており、その解題（『群書類従』第四下所収、玉村氏執筆）には、以下のように記されている。

（上略）この碑銘は、貞治五年（二三六六）夢窓の門人義堂周信（二三二五—二三八八）が、目子（作文の素材を簡条書にした目録）を入明する同門の絶海中津（二三三六—一四〇五）に託し、ひそかに当時随一の文案宋謙に撰文を依頼せしめたが、当時倭寇等のことから、明の日本に対する感情が悪化し、宋謙は、これを憚って、撰文が延引されていった。絶海は、応安六年（洪武六年）来朝して帰朝した天台僧無逸克勤（のち還俗して華克勤といひ、宰相となる）を介して宋謙にそのことを催促した。よって洪武八年（永和元年、一三七五）、宋謙はその文を製した。しかし水くこの文は日本に持帰られなかった。応永十一年（一四〇四）、遣明使として入明した明室梵亮（龍峯の弟子）が帰朝する際に、出発の前日、名を告げないある者が、夜中に旅館を

おとづれ、宋濂から遺囑され四十年来秘藏して好便を待ったといつてこの碑銘を手渡したので、明室はこれを日本に齎しかへつた。のち、絶海の法孫古那慧淳が、土佐から巨石を運んで、三雲院に、この碑文を刻して建てようと企てたが、運賃がかさむので、そのまま中止になつた。(下略) (二五〇頁)

「日吉集」の巻末には、碑文將來の由来記が付されており、右の解説はそれによつてゐる。

(8) 引用は「五山文学新集」第一巻による。返り点は私に施した。

(9) 横川の作品で「東人」という語を確認してみよう。

I (上略) 故曰、子願即天下願也、不_レ其然_レ乎、願_レ此集中掛_レ名者、桃源為_レ首、而_レ管子故人也、已知_レ子願_レ乎、兼告_レ予言_レ可也、異日儻見_レ記者_レ焉、子將_レ再遊_レ赴_レ東人之約、欲_レ留_レ之、豈可_レ得乎、与_レ其旧業徒_レ歎_レ黍離、孰_レ若_レ隨_レ處_レ暫宿_レ桑下_レ、其意亦真乎、草木知_レ名、蓋_レ敬_レ此人、江山為_レ助、果得_レ此集_レ、爰徵_レ后叙_レ、拒而不_レ允、末如_レ之何、(下略) (小補東遊集「后叙」)

【注】「桃源」とは桃源瑞仙のことである。

II 拜別以來、日久歲深、伏惟、尊候万福、景徐報_レ便而來、一咲折_レ屐、所以作_レ此紙_レ也、高駕入_レ東、々々皆服、其化、雖_レ失_レ於_レ此、而得_レ於_レ彼、歎_レ羨々々、(下略) (景花集「写_レ九万里書」)

【注】「景徐」とは景徐周麟、「九万里」とは万里集九のことである。

I の文章は、「小補東遊集」の後序からの抜粋である。「小補東遊集」は、横川が応仁の乱を避けて、東方の地近江に遊んだ時に詠んだ作句を収めたもので、その序文は、横川の文学上の師にあたる瑞溪周鳳(一三九一—一四七三)が記している(「五山文学新集」第一巻・解題。同序によると、応仁二年(一四六八)夏、一旦、近江から京都に戻つた横川は、東山今熊野の養源院で師兄龍淵本珠との再会を果たした後、北岩歳の慈雲庵に隠棲

していた瑞溪の許を訪れ、「小補東遊集」の序を請い受けた。瑞溪は、横川の突然の來訪を喜び、再び近江に帰ることを快く思わなかつたが、親友桃源瑞仙(一四三〇—八九)が横川の帰りを待つていたので、やむなく東帰を許したという。「子將_レ再遊_レ赴_レ東人之約、欲_レ留_レ之、豈可_レ得乎」この場合の「東人」は近江の人、具体的に言うつと、桃源あるいは外護者の小倉実澄のことを指しているか、と思われる。彼らとの約束は、「小補東遊集」所収の「寄_レ桃源_レ詩并序」によると、百余日の間に近江に戻るこゝだつた。

II の文章は、横川が万里集九(一四二八—一五〇七?)に宛てた書簡の一節である。同書には「少雲・桃源今則亡」というくだりがある。少雲登についてはよくわからないが、桃源の没年は延徳元年(一四八九)十月二十八日のことなので(「藤原軒日録」等)、「高駕入_レ東、々々皆服」其化」というくだりは、文明十七年(一四八五)、万里が太田道灌(一四三三—一四八〇)に招かれて江戸に遊んだことを述べていると思われる。万里は、東遊する前から、道灌や上杉定正をはじめとした関東の武将たちと交流があり、東遊してからも、道灌が主催する詩歌会に出席したり、道灌の伯父にあたる叔悦禪僧に請われて黄山谷詩の講義をしたりしている。中川徳之助氏の「万里集九」(人物叢書、吉川弘文館、平九)参照。この場合の「東人」は関東の人を意味している、とわたくしは解している。なお、景徐周麟(一四四〇—一五一八)の「翰林胡蘆集」第十四所収の「鹿苑院殿百年忌隱座散説」には「(上略)吾朝榮_レ増受_レ戒者三処、其一者菟之觀音、便_レ于西人也、其_レ吾和之東大、便_レ于中人也、其三若野之薬師、便_レ于東人也、迨_レ乎延暦成壇之興、而野之薬師廢矣、故東人皆忿_レ路難_レ登_レ比叡壇者、歳々為_レ夥也、(下略)」や、「(上略)伝聞前年円覚寺有_レ靈異事、一日有_レ物降_レレ、自_レ天、視_レ之則舍利也、東人至_レ此者言_レ之、將_レ信_レ然乎、不信_レ然乎、京師鎌倉兄弟之國也、(下略)」という文章があることを付記し

ておく。

(10) 引用は辻善之助氏「空華日用工夫略集」(大洋社、昭一四)による。返り点は藤木氏「訓注 空華日用工夫略集」(思文閣出版、昭五七)を参考にし、私に施した。

(11) 引用は「大正新修大藏經」第八十卷「純諸宗部」による。返り点は同書を参考にし、私に施した。

(12) 全文は以下の通りである。

五一 送人之相陽

西州雖好戰黃廣。千里相陽婦與長。衣袂盛花兼菓葉。軍持盡水掛紗囊。禪心慣看海天月。客意初驚山路菊。到日諸昆如問我。慳懷不似昔清狂。

(13) 中国文学における用例を見ると、たとえば杜市の「壯遊」という詩に、

(上略)放蕩齊趙間。裘馬頗清狂。春歌「叢台上」。冬獵「青丘旁」。呼鷹早樛林。逐獸雲岡。射飛曾縱轡。引臂落鵝鶩。蘇疾捷。鞍喜。忽如携葛強。(下略)

(四部叢刊所収本。返り点は鈴木虎雄氏註解「杜市全詩集」(日本文学センター、昭五三)を参考にし、私に施した)

とある。二十四歳の時、郷貢生として受験のために都(長安)へ送り出された杜市は、あいにく落第してしまう。そして、その帰りがけに齊趙の地方(山東省と山西省)に気儘に遊び、軽裘肥馬、すこぶる清狂の態を尽くすこと、かれこれ八、九年にも渡ったという。「春歌「叢台上」」以下に記載されている杜市の行動は、甚だ常軌を逸しているが、自らが意図して破天荒に振舞っているところに、彼の信念(主張)のようなものが見え隠れする。杜市の「遺興 五首」のうちの一首に、飲中八酒仙の一人である賀知章を詠じて、「賀公雅異語。在位常清狂(下略)」とある。また、同じく杜

市の「遺興 四首 路十九首長」という詩に「上略 晚節漸於詩律細

誰家教去酒杯寬。唯君醉愛清狂。百遍相過意未闌。陸游の「赴成都泛舟自三泉至益昌。謀以明年下三峡」という詩に「詩酒清狂二十年。又摩病眼看西川。(下略)」、吳補之の「次韻張著作文潛

飲王舍人才元家。時坐客戶都李尚書公。光祿文少卿周翰。大理杜少卿君章。黃著作魯直」という詩に「上略 妍歌聽黃子。不飲亦清狂」と詠じられているように、「清狂」という語に「酒」が因らわっているのも、竹林で酒を飲み、琴を弾じて、清談を行なったという「竹林の七賢」のこと

く、俗世間から逸脱しつつも、自己の信念(主張)を貫き通そうとする強靱な精神力がそこに介在していたからであろう。

翻つてわが国の五山文学における用例を見ると、今のところ、以下に挙げた五例しか見付けることができなかった。

○梅竹堂堂告。琴樽引興長。殘黍徒欄醉。万事輕清狂。月影深窺帳。春陰半擁床。君恩猶到此。一飯莫相忘。

(宇憲齋吟「大賢居士紀公梅竹堂堂詩」)

○琉璃淨潔柱徽張。一曲山出舞飲光。若使無絃彈別調。底碧空宏引清狂。

(清北集「琴」)

○秋風鼓笛笳。清狂。哭一場兮笑一場。識得從來無二法。玄沙只是謝三郎。

(了幻集「看戲劇」)

○醉掃袍袖池香塵。芸閣題詩彩筆新。莫怪清狂唯愛酒。床頭長是一壺春。

(雲門一曲「課次日新菴上人見示韻」)

○(上略)天隱也者。聖賢者之所自而出也。友社所稱。所待於公之者。其在茲歟。或玩。或句。以官于朝。或遊。或處。以託于清狂清狂。或屠狗。或屠牛。或卜筮。或醫藥。以充于市門里巷。隱之巧者也。或隱仙。或卓行。或任塗捷徑。以耕釣牧于樵南山之南北山之北。隱之高者。論者也。皆人隱者也。(下略)

〔業鏡台〕（天隱字叙）

「風狂」は一休宗純（二二九四—一四八二）を形容する語として有名であるが、「清狂」は五山の詩文であり見受けられない語である。五山文学における意味・用法も、中国文学におけるそれと変わらないようである。

〔14〕引用は百衲本「千四史所取本による。へ」内は割注を示す。返り点は私に施した。

〔15〕引用は四部叢刊所取本による。返り点は竹内照夫氏校注「韓非子」上（新釈漢文大系11、明治書院、昭三五）を参考にして、私に施した。

〔16〕「日工集」応安元年八月二日条に、

八月二日、為「諸子」講「高僧靈」一詩、按靈一、僧伝所謂「三言三二也、三二者会稽靈二・閩州懷一・慶雲靈一也、

とある。

〔17〕「蕉殿遠」に取められていない詩が、他書に見受けられることがある。

○建仁寺阿尼院威「東海瑠華集（絶句）」

漫書「芭蕉」

幻質從來不「自持」。区々保爾復胡為。題名未「必留」千歲。大小秋

風一任「吹」。

謝「入惠」蕉苗一

遠採「蕉苗」為「我分。義情高薄万層雲。秋來若有「紫眠雨」。一片愁

心却恨「君」。

破衣

百結懸鷄眉下垂。春風幾度着心吹。七零八落似「何処」。窗外芭蕉秋

暮時。

竹之聲

叢々夏玉此眞簫。風影參差午每涼。遙想退朝耽「禁趣」。淇園漚歌在「

高堂」。

○「中華若木詩抄」（抄文は省略する）

釣台

生来不「レ」説「世興亡」。風雨蓑衣面鬢霜。只合「蘆花深處夢」。一竿釣
莫「レ」到「文王」。

惜春

万般春色看成「空」。多少飛花暮雨中。黃鳥數声人寂々。柳絲無力「繫」東風。

○「翰林五風集」卷第四十八

画馬障子「二首

憶昔開元全盛時。殿前奉「レ」詔舞「權奇」。君恩一夢馬官語。沙苑晚風
吹「寒梨」。

伯梁難「逢馬易」逢。風懸霧鬣為「誰容」。一鳴騎出長楸巷。十二天閑
無「此龍」。

画

春江西過綠「於岩」。四面窓扉快意開。晨鶴橙々無「浪証」。果有「詩
客策「馬」來」。

これらの詩がどのような経緯を経て他書に取められたのかはわからない

が、「蕉殿遠」定稿時に除かれた作品である可能性もあるだろう。

※引用本文については、旧字体や異体字を私に改めた箇所がある。

〔付記〕

本稿は平成十年度広島大学国語国文学会秋季研究集会（十二月二十二日）における口頭発表を加筆修正したものである。

——あさくら・ひとし、本学大学院博士課程特別生——